

第9回

「元村松晴嵐荘病院，現茨城東病院」



結核予防会

顧問 島尾 忠男

旧傷痍軍人療養所のはしり

今回の訪問先は茨城県水戸市に近い国立病院機構「茨城東病院」，元の名は除役結核軍人療養施設「村松晴嵐荘」である。同行は竹下専務，一健の長澤氏とSTBJ事務局の宮本さん。齋藤武文院長他現役の事務方に加えて，第8代院長で名誉院長の深井志摩夫先生まで，わざわざ静岡から駆けつけて頂き，恐縮至極であった。

戦前の軍隊では衛生の面で悩みの種は結核と脚気であった。特に結核は若者を中心に蔓延していたので，兵舎での共同生活は感染を促す機会となり，厳しい訓練は心身を疲れさせ，発病を促し，それに戦地での困難な状況が加わると，事態は一層悪化した。こうして結核のために兵役を免除されるものが増えてくる中で，わが国で最初の結核により除役された者のための施設として作られたのが村松晴嵐荘であった。当時衛生問題を主管していたのは内務省であったが，旧水戸藩主徳川圀順くにゆき公爵を会頭に頂く民間団体である日本結核予防協会にこの運営を委託することになり，建設費は三井報恩会の寄付で賄い，最初の50床が完成し，昭和10年10月17日に内務省予防課長であった高野六郎氏を荘長として除役結核軍人患者の受け入れを始め，残りの工事を継続した。

村松晴嵐荘という施設名は，水戸八景から建物のある場所の地名のついた「村松晴嵐」からとったものであり，建設と運営を日本結核予防協会に委託した理由としては，勘ぐれば結核療養所建設に際して起こりがちな反対運動を抑えるために，会頭が旧水戸藩主である結核予防協会に運営を委託し，反対運動をやり難くする意図があったのかも知れない。

最初の国立療養所に

国は増え続ける除役結核軍人対策として，国立療養所を整備することとなり，昭和12年6月23日に国立

結核療養所官制が公布された。これに対応して，日本結核予防協会は晴嵐荘を国に寄付することを議決し，最初の国立療養所村松晴嵐荘が，開設以来医務の実務を指揮してきた西野重孝氏を初代荘長として発足した。当時の収容患者数は207名であった。

翌昭和13年1月11日，厚生省が内務省から分離独立し，村松晴嵐荘も厚生省主管の最初の国立療養所となった。

歩行・作業療法の基準の設定から社会復帰へ

当時の結核療養所は，新鮮な空気の下で，栄養のある食事を摂りながら，病状に応じた安静を守り，身体の抵抗力を強化して結核に克つ療養生活を送る場所であった。痰の菌が陰性化すれば，少しずつ歩行の距離を伸ばし，作業負荷を増やす方法が採られていた。これを組織化し基準を作ったのが2代目の荘長木村文明先生である。社会復帰のために簿記，珠算，竹細工等の教室が作られ，後には機械工場も設置された。

外科療法の先駆者

村松晴嵐荘には，慶応大学医学部出身の医師が多く勤務していた。その中には胸部外科出身者もあり，外科の前田和二郎教授は自ら晴嵐荘に赴いて，昭和13年1月30日には横隔膜神経捻除術を執刀し，同年2月27日には胸郭成形術を執刀しておられ，晴嵐荘は肺結核外科療法の先端をゆく施設となった。敗戦後日本でもペニシリンが使えるようになり，手術の安全性は急速に向上したが，この段階で外科療法を発展させたのは，昭和37年1月に3代目荘長となられた加納保之外科医長であり，先生はその業績により昭和31年に保健文化賞を受賞しておられる。

頻繁な所管と名称の移り変わり

日本結核予防協会という民間団体の施設として発足し，国立療養所官制の布告と共に国立に移行した晴嵐荘は，その後5回の名称変更を経験することになる。

昭和17年4月には「日本医療団令」が公布され、医療機関の一元的な運営が図られたが、晴嵐荘の場合には傷痍軍人の結核患者を取り扱う特別な施設ということから、昭和13年に厚生省の外局として傷兵保護院という名称で設置され、翌昭和14年に軍事保護院と改称されていた組織のほうが主管官庁としてふさわしいということから、昭和17年11月に傷痍軍人療養所村松晴嵐荘と改称された。

敗戦後の昭和20年12月には厚生省医療局官制が施行され、国立療養所村松晴嵐荘となった。昭和20～30年代の結核診療全盛時代から、40年代に入って結核で入院する者が急速に減少し、晴嵐荘では重症心身障児の受け入れを始めるとともに、増加してきた肺ガンに対応できる診療機能を拡大し、昭和51年5月には厚生省通達により国立療養所晴嵐荘病院と改称した。

昭和54年には2次救急を引き受け、平成2年には県の肺がん専門施設となり、平成16年4月に独立行政法人国立病院機構東茨城病院と現在の病院名に改称し、深井第8代院長の指導の下に経営も安定し、結核

病床を持つ胸部疾患の診療施設、療育センターとして、地域住民から信頼される診療活動を展開している。

戦争と結核

村松晴嵐荘は日本最初の傷痍軍人療養所であったが、その後戦争の激化と共に結核で除役される兵員も急増し、敗戦時には全国に53の傷痍軍人療養所があった。日本ほどではなかったが、米国でも在郷軍人会が運営する結核施設が作られ、そこでの統一された方式による共同研究で結核の治療について発表されるデータが、VA (United States Department of Veterans Affairs, アメリカ合衆国退役軍人省) の報告として戦後しばらくの間注目された。日本では傷痍軍人療養所に日本医療団所属の療養所が加わった国立療養所で、東京病院砂原院長のリーダーシップの下に共同研究組織が作られ、国療化研として多くの臨床共同研究が進められた。

我々は、二度と傷痍軍人療養所が必要となるような事態が起こらないことを願いながら東海村を後にした。



初代荘長
西野重孝先生



第2代荘長
木村猛明先生



第3代荘長
加納保之先生



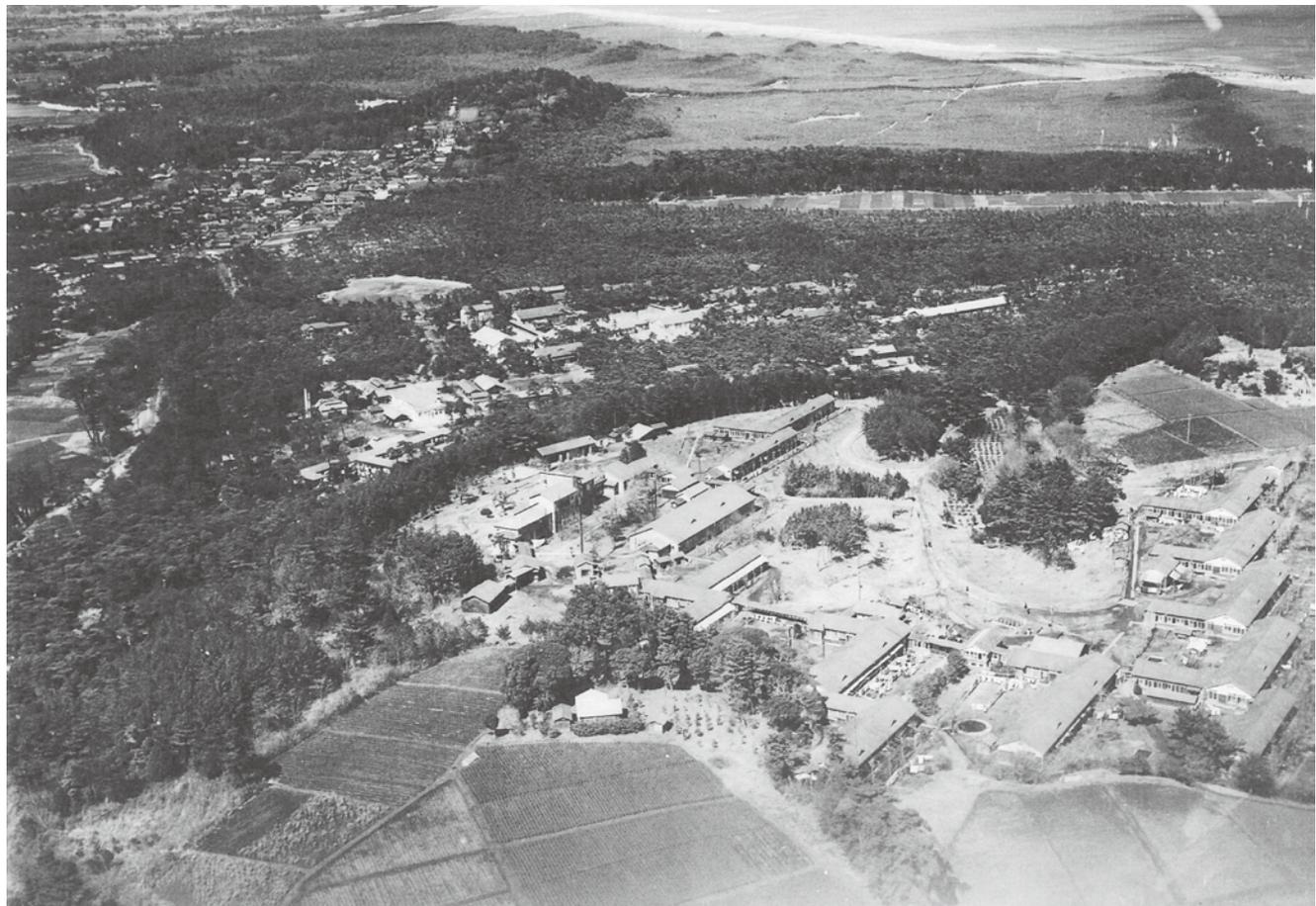
第8代院長 (名誉院長)
深井志摩夫先生



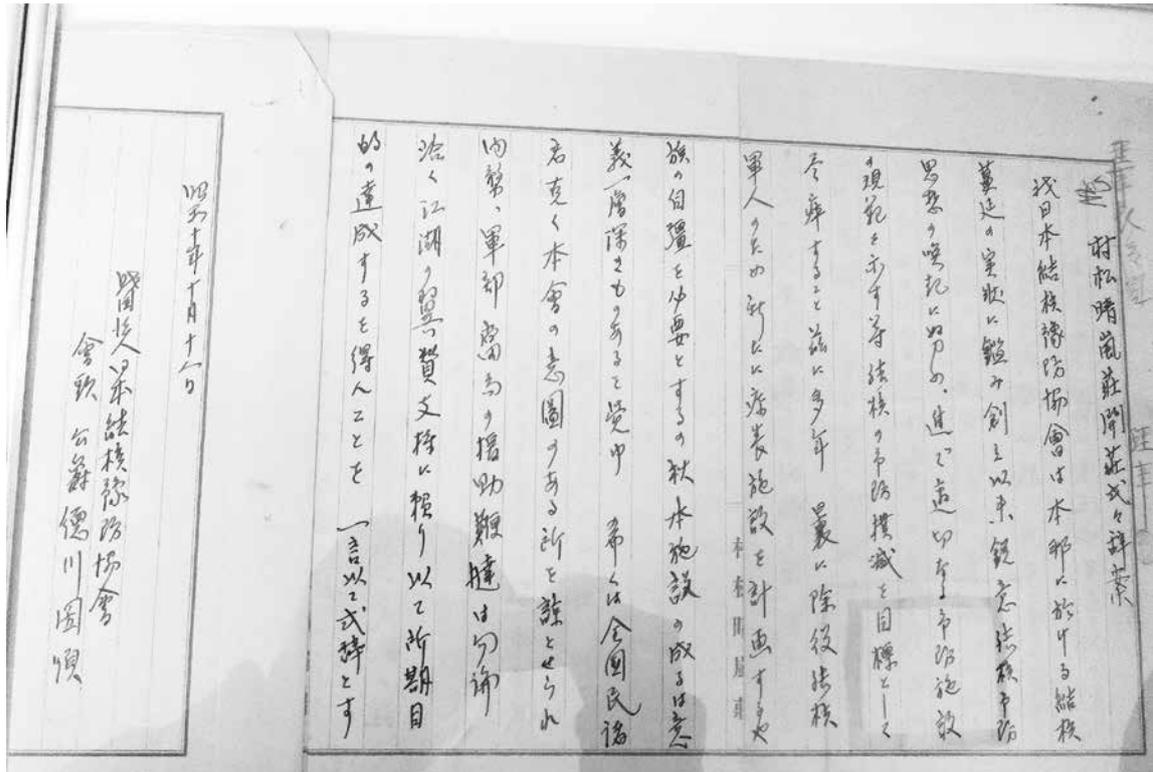
病院長 (現在)
齋藤武文先生



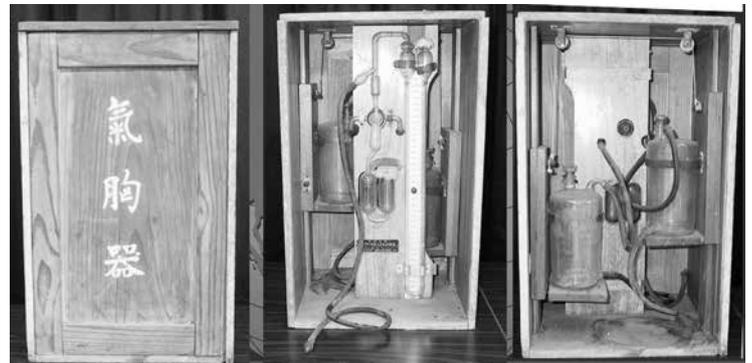
建物配置図（開荘当時）



空撮



日本結核予防協会会頭の徳川園順公爵の村松晴嵐莊開莊式式辞案



胸腔に空気を注入して人工的に氣胸を作っていた氣胸器



建物外観（玄関）



深井名譽院長から資料の説明を受ける筆者